

事 項	内 容
1. 「一押し」の絵画	<p>作者名：ヨハネス・フェルメール            作品名：真珠の耳飾りの少女</p> 
2. 作者の紹介	<p>ヨハネス・フェルメール（本名ヤン・ファン・デル・メール・ファン・デルフト）はオランダで生まれ、バロック絵画を代表する画家のひとりである。映像のような写実的な手法と綿密な空間構成、光による巧みな質感表現を特徴とした絵が多くみられる。作品数が少なく個人コレクションであったため、18世紀にフェルメールの名は急速に忘れられたが、19世紀にフランスで再び脚光を浴びることとなった。</p>
2 作品の時代背景など	<p>1665年頃制作 この作品はオランダ黄金時代と呼ばれる17世紀中頃に生まれた。商業が発展し中流階級が台頭した時代に描かれ、当時の女性たちのファッションを反映した作品といわれる。また真珠は高価で贅沢な素材として重宝されており、大きな真珠の耳飾りは富と権力の象徴であった。さらにトルコ風のターバンは17世紀オランダで流行した異国情趣を表しており、少女に神秘的な印象を与えている。これらの要素から当時のオランダの社会や文化を理解することができると思われる。</p>
3 この絵画を選択した理由	<p>高校生のとき美術の授業で模写をしたことがきっかけで、大塚国際美術館を訪れた際には見てみたいと思っていた。光の反射だけで大きな真珠の立体感を表しており、少女の顔や衣服の陰影が特徴的だった。「真珠の耳飾りの少女」は、描かれた人物が明らかでないことや異国風な衣装、誇張された表情などから想像上の人物を描く「トロニー」であると考えられている。こちらを振り返るような少女の表情が印象的だった。大きな瞳や少し開いた口から様々な感情が読み取れると感じた。</p>
4 新入生セミナーに参加して	<p>新入生セミナーの一環として大塚国際美術館を訪れた。入学して間もない私は、同じゼミの人たちとまだ打ち解けきれておらず、緊張した気持ちで参加した。しかし、館内を一緒に回りながらお互いの写真を撮ったり、印象に残った絵について話し合ったりするうちに、会話や笑顔が増えていった。美術館を出る際には、最初の緊張や不安はすっかりなくなり、距離が縮まったように感じた。このような経験を通して、人との関わりやコミュニケーションの重要性を改めて実感した。大学生になり新たな友人との出会いが増え、環境に慣れないこともあるが、そうした不安も含めて大学生活をより豊かで、充実したものにしていきたい。</p>